

14. 露地栽培におけるキュウリ褐斑病とべと病との見分け方（技術）

[要約]

キュウリ褐斑病とべと病との区別は病徴だけでなく、発生時期や耐病性を考慮するとより確実な診断ができる。

研究室名	病虫研究室	連絡先	0869-55-0543
------	-------	-----	--------------

[背景・ねらい]

キュウリ褐斑病の病徴はべと病との見分けがむずかしく、薬剤散布の適期を逃す場合が多い。そこで、県中部におけるキュウリ褐斑病とべと病を病徴だけでなく発生時期などを加味して区別する。

[成果の概要・特徴]

1. 5月定植のキュウリにおける褐斑病は、7月上旬から初発生し、7月中旬以降急増して9月上旬まで漸増した（図1）。7月定植では、7月下旬に初発生し、8月上旬から9月まで漸増した。
2. ベと病は、5月定植では6月中下旬に初発生し、7月にはやや多発したが、8月には病勢が停滞した（図1）。7月定植では、7月下旬に初発生し、8月には停滞したが、9月中旬から再び病勢が進展した。
3. 褐斑病の急増期（7月中旬）には、同一葉にべと病と混発して区別が難しいが、褐斑病の病斑は不整形で円みを帯び、やや赤褐色であるのに対し、べと病の病斑は葉脈に区切られて角張り、黄褐色であることから両病害は区別できる（図2の写真左）。
4. 褐斑病の後期病斑とべと病の後期病斑はよく似ており、肉眼での識別が難しくなる（図2の写真右）。

以上の結果、褐斑病とべと病は発生時期や病徴比較からキュウリの生育初中期までは区別できる。ただし、品種によって病斑の発生状況が異なることがあるので、品種の耐病性も加味して総合的に両病害の見分けをする。

[成果の活用面・留意点]

1. 褐斑病の発病推移は、山陽町や建部町の県中部を対象としており、北部ではやや異なる場合があると考えられる。
2. キュウリ品種の秋美人、シャープ I は褐斑病に耐病性であり、夏すずみ、夏ばやしはべと病に耐病性であり、ステータス夏Ⅲ、ときわ金星 2 1、T-15 1、T-15 2 は両病害に耐病性である。

[具体的データ]

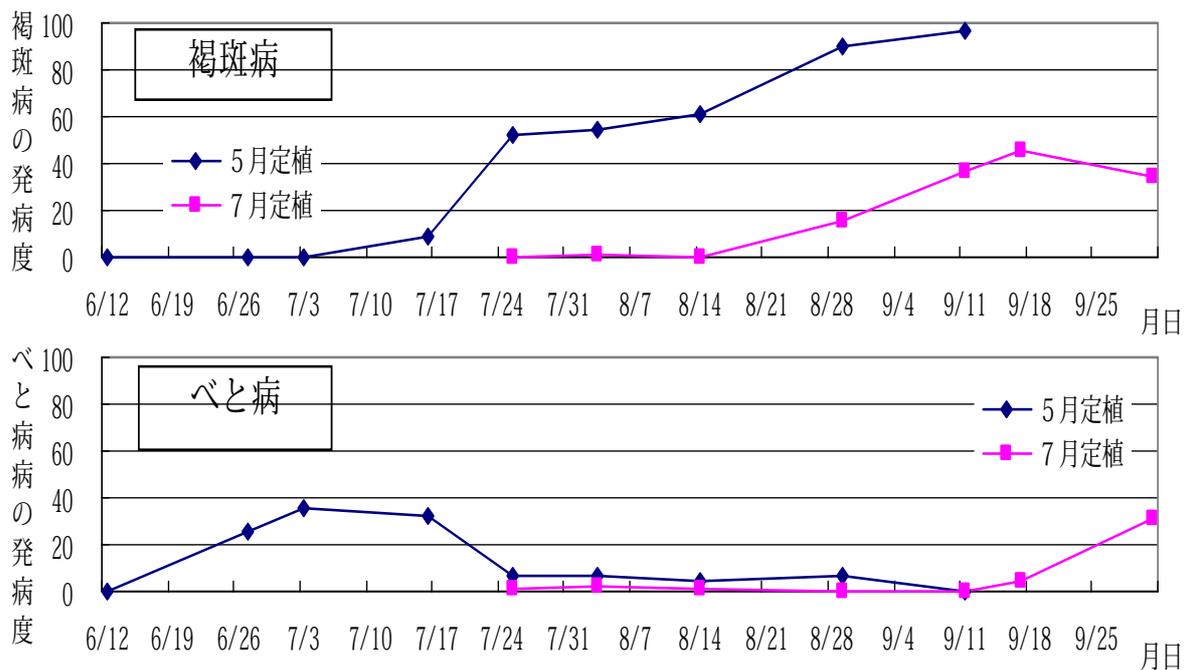


図1 キュウリ褐斑病とべと病の発病推移（平成13年）
（5月定植：つや太郎、7月定植：T-152）

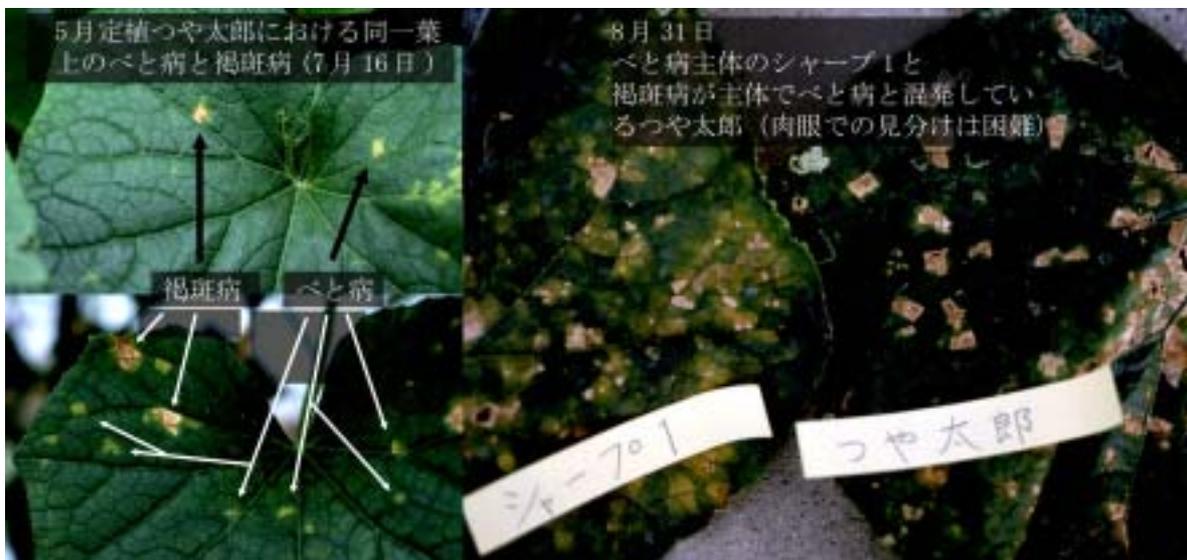


図2 キュウリ褐斑病とべと病の病徴比較

[その他]

試験研究課題・事業名：コリネスポラ菌によるトマト褐色輪紋病，キュウリ褐斑病の発生生態の解明と防除対策

予算区分：国補

研究期間：平成13～15年度

関連情報等：平成13年度主要成果：キュウリ褐斑病、べと病、炭疽病に対する

主要露地栽培品種の耐病性